

国境を越えて広がる学びと交流。 ウズベキスタン短期教育プログラム。

2024年12月9日、金城学院大学文学部・人間科学部は、ウズベキスタン共和国の※マームーン大学(外国語学部・心理学部)と、学生・教員の国際交流および学術交流に関するパートナーシップ協定を締結しました。この協定に基づき、文学部では2025年6月23日(月)から7月5日(土)までの2週間、日本文化や日本語を学びたいウズベキスタンの学生を対象とした短期教育プログラムを主催。20名の学生が参加し、充実した学びと交流の2週間を過ごしました。今回は、このプログラムの企画・運営に携わった文学部のアシュエロバ先生に、この活動への思いを伺いました。



Ashurova Umidahon

アシュエロバ・ウミダホン

金城学院大学 文学部 英語英米文化学科教授。
英語スペシャリスト養成プログラム通訳授業を担当。

ウズベキスタンでは 日本語・日本文化への関心が高まっている。

ウズベキスタンの人口は約3,700万人。そのうち約60%が30歳以下という、若い世代の多い国です。経済成長の真っ只中であり、発展を遂げた日本への憧れや、先進的な科学技術・IT分野への関心を持つ若者が増えています。また、日本のアニメやマンガをきっかけに、日本文化や日本語に興味を抱く学生も少なくありません。

こうした背景を受け、マームーン大学では2024年9月に、地域で初となる「日本語教育センター」を設立しました。開設初年度には70名、2年目の今年は200名の学生が日本語を学んでいます。本学の短期教育プログラムにも多くの応募がありましたが、日本語能力が一定水準に達している学生を対象に選抜を実施。マームーン大学から12名、他大学から8名の、計20名が参加しました。学生たちは2週間にわたり、日本語や日本文化を集中的に学び、さまざまな体験を通して学びを深めました。



12月9日に行われた
パートナーシップ
協定式で。

中部国際空港に到着
したウズベキスタンの
学生たち。



本学国際交流センターで行われた
ウェルカムパーティーの様子。



書道の授業風景。

プログラムを終了して記念
撮影。明るくてアクティブ
なウズベキスタンの学生
たちに、本学の学生も大い
に刺激を受けました。



多彩なプログラムで 学びと絆を深めた2週間。

プログラムの実施にあたっては、文学部の教員を中心にプロジェクトチームを編成し、カリキュラムや各種プログラムを綿密に準備。語学研修から文化体験まで多彩な内容が盛り込まれ、学生たちにとって非常に密度の高い学びの機会となりました。

1日のスケジュールは3コマ構成。1コマ目は日本語の研修、2コマ目は日本の経済・文化・歴史などに関する英語での講義、3コマ目は日本文化の体験授業を行いました。文化体験では、浴衣を着て日本舞踊に挑戦したり、日本食を作って味わったり、茶道や華道、書道などにも挑戦。さらに、京都への研修旅行や愛知県美術館での見学も実施しました。見て、触れて、感じて——楽しみながら日本文化を学ぶ時間は、学生たちにとってかけがえのない思い出となりました。

このプログラムのもう一つの特長は、本学英語英米文化学科の「英語スペシャリスト養成プログラム」を専攻する学生たちが、授業サポートとして参加したこと。文化体験授業の通訳や、最終日の発表会で行われた駐日ウズベキスタン共和国大使のオンライン挨拶の同時通訳など、通訳者としての実践的な経験を通じて、大きな学びを得ることができました。

プログラムが終了し、学生たちは母国へ帰りましたが、その翌日に実施された日本語能力試験では、マームーン大学からの参加学生12名全員が合格したという嬉しい知らせも届いています。今回のプログラムにご尽力くださった文学部の先生方や学生の皆さん、そして学内の教職員の皆さんに心より感謝申し上げます。今回のプログラムを機に、日本とウズベキスタンの絆がさらに深まり、今後のより豊かな交流へとつながっていくことを願っています。

※マームーン大学(Ma'mun University)はウズベキスタンのホラズム州ウルゲンチ地区に位置する私立大学で、学生数は約9,000人。教員は教授・准教授・講師を含めて約180人。4学部、8学科7専攻を擁し、経済・商学科や人文学科に加え、医学系も学べる総合大学です。



多様な人との関わりが、心を育む。

— 金城学院各校との連携の取り組みを通して —

幼稚園には、大学や高校、中学校から多くの方々年間を通して遊びに来てくださいます。実習など学びのために訪れる学生や生徒との交流はもちろんのこと、毎年夏期保育中には、高校キャラバン隊の皆さんが、楽しい人形劇を披露して下さいます。また秋には、理科の先生方が天体観測会を開催して下さったり、今年度は新たな取り組みとして、年長児にサイエンスショーを見せて下さいました。同年代の友だちや身近な保育者だけでなく、様々な世代や専門職の先生方と関わりを持つことができる豊かな環境は、総合学園ならではの魅力です。

サイエンスの世界に心が動く。

今年度、初めて開催したサイエンスショー。保育者ではなく、白衣姿の凛々しい中学校の先生が目の前で実験を見せて下さるといふ機会は、とても貴重な経験となりました。ガスバーナーや液体窒素など、幼稚園では見たことのない実験器具に興味津々の子どもたち。炎に様々な水溶液を吹きかけると色が変化する『炎色反応』の実験では、魔法のような光景に子どもたちから「わぁ!!」「すご〜い!」と歓声が上がりました。また、液体窒素の中にバナナや風船、花を入れると、カチコチに凍ったり、縮んだりする現象には、「えーっ!!」「何でっ?」と大興奮。実験に夢中になっている子どもたちは、楽しい、面白いと感じ

るだけでなく、「どうなっているんだろう?」「不思議だな」「やってみよう」と心を動かします。子どもたちの内側にむくむくと湧き上がる探究心が、生き生きとした表情に現れていました。

高校生の姿に憧れの気持ちを抱く子どもたち。

キャラバン隊の可愛い高校生のお姉さんが登場すると、子どもたちはこれから何が始まるのかと目をキラキラ輝かせます。今年も楽しい手遊びと、人形劇を2つ見せて下さいました。劇の終わりに人形たちが全員揃って「わ〜い わ〜い おしまい♪」と言う台詞。このリズムカルなフレーズは子どもたちのお気に入り。1年経っても覚えている子がいるほどです。楽しそうに演じる高校生の姿を見て、「お姉さんたちのように劇をしたい」「あんな可愛い人形を作りたいな」と早々に真似をして遊び始める子どもがいます。目の前に具体的な憧れのモデルが現れ、目標ができるからです。憧れから始まる遊びは主体的で、創意工夫や試行錯誤も楽しいもの。その過程が、子どもたちの心を豊かにします。

ヒトはもともと社会の中で、人々が暮らす姿を間近に見たり、真似をしながら、お互いに「学ぶ」生き物だと思います。幼稚園では、子どもたちの心に成長の種をまいて下さる多様な方々と身近に関わることができる環境に感謝し、これからも交流を深めていければと思っています。



「炎色反応」の実験。
美しい色の魔法に
大きな歓声が。



キレイ!!



風船を液体窒素の中に入れるとしぼみ、取り出すと、元の大きさに膨らみます。



すごい!



サイエンス
ショー

子どもたちの“なぜ?”や“ふしぎ”をきっかけに、科学の芽がいっぱい育ちました! ありがとうございます。



モクモクと立ち上る白い煙に子どもたちは大興奮。



キャラバン隊のお姉さんたちは子どもたちの憧れ!



子どもたちが大好きな手遊びも披露してくれました。

キャラバン隊

バイバーイ、またね。高校生のお姉さんと人形に見送られる子どもたち。



人形たちのセリフとコミカルな動きに、お話の世界へどンドン引き込まれていきます。

またあそぼうね!!





技の一つひとつに感謝の気持ちを込めて。 空手道と共に歩み、挑戦し続けた日々。

本校空手道部の主将として部員たちをまとめ、引っ張ってきた浅井梓恵奈さん(高3)。2025年は第57回愛知県空手道選手権大会(少年女子 形の部)と第79回愛知県高等学校総合体育大会空手道競技(女子個人形)で優勝。念願だったインターハイや第79回国民スポーツ大会への出場も果たし、積み上げてきた努力が実を結びました。すべての試合を終えたいまは「やり切ったという安堵感と、本戦で勝てなかった悔しさがなймаぜになっています」と浅井さん。その眼差しには、凛とした強さとしなやかさが宿っていました。

空手一家に育ち 練習に打ち込む日々。

空手道には、1対1で戦う「組手」と、技の正確さや美しさを競う「形」があります。浅井さんは「形」の選手で、持ち前のスピードや緩急、力強さを武器に数々の大会で輝きを放ってきました。

空手道を始めたのは5歳のとき。祖父の代から空手道場を営み、父は師範、母も経験者、姉と弟も空手道選手という空手一家で育った浅井さんにとって、道着に袖を通すのはごく自然なことでした。

平日は部活動後も道場で2時間、部活のない日は3時間ほどの練習を重ねる日々。「やめたいと思ったことは何度もあります」と浅井さん。「試合と定期テストの時期が重なり、勉強も練習も手を抜けない。練習をしないと試合結果に表れてしまうから、苦しい時期もありました」

それでも続けてこられたのは、家族の支えがあったから。弱音を受け止めてくれる家族に気持ちを吐き出すことで、再び前を向くことができました。

4つ上の姉が個人形でインターハイに出場した姿も大きな励みになったといいます。

極めれば極めるほど奥深い。 それが「形」の魅力。

形はひとりで演じますが、突きや蹴りなどの動きの先には「見えない相手」が存在します。「その相手をどれだけ意識できるかで、技の力強さやスピードが変わります」と浅井さん。「空手道を知らない人には舞っているように見えるかもしれませんが、動作の一つひとつに意味があり、それこそが形の魅力であり、奥深さです」といいます。

自分の強みを「運が強いこと」と笑う浅井さんですが、運だけでは勝てないことも知っています。だからこそ、日々の練習を地道に重ねてきました。

空手道部顧問の安藤真梨乃先生は話します。「部員の多くは初心者。浅井さんは本来不要かもしれない基礎練習でも率先して取り組んでいます。大会前にはメンタルや体調管理のアドバイスもしてくれるなど、主将として部をしっかりと引っ張る頼もしい存在です」

自分らしさを出せた最後の舞台 国民スポーツ大会。

これまで数多くの試合を経験してきた浅井さんにとって、特に印象に残っているのは今年のインターハイ予選と国民スポーツ大会(国スポ)。目標だったインターハイ出場を決めたときは、嬉しさとともに、ようやく肩の力が抜けたといいます。

そして迎えた国スポ。全国からトップ選手が集うこの大会は、浅井さんにとって選手生活の区切りとなる舞台でもありました。「勝ちに行くというより、自分の力をすべて出し切ろうと思って臨んだので、プレッシャーもなく自分らしい演武ができました。頑固な私に最後まで付き合ってくくださった顧問の先生や師範の方々、いつも励ましてくれた家族、そして部活仲間や友人たちにも感謝の気持ちでいっぱいです」

卒業後は関西の大学で法律を学ぶという浅井さん。空手道を通して学んだ礼節を重んじる心、周囲の人々や環境への感謝の思い、そして努力を積み重ねる強さ。そのすべてを糧に、これからも新しい舞台で自分らしく挑戦を続けていくことでしょう。



空手道部顧問の安藤真梨乃先生と浅井梓恵奈さん。



見事優勝を勝ち取った2025年愛知県高等学校総合体育大会での演武。



2025年は大活躍の年でした。



空手道部の練習風景。



空手道部の仲間たちと。



“誇りの持てる美しい作品”をテーマに 3歳児の“探究心”を育む おもちゃづくりに挑戦。

「3歳児が探究できるおもちゃ」って、どんなおもちゃだろう？

そんなユニークなテーマに、3年生たちが挑戦しています。紙飛行機づくりを通して“探究することの面白さ”を体感し、金城学院幼稚園では園児たちと遊びながらヒントを発見。おもちゃづくりを通して生まれた気づきや発見、そして完成に向けた思いを、生徒たちとDignity科主任・後藤敬太先生に伺いました。



写真左から 後藤敬太先生、白石唯羽さん、加藤玲衣さん、内山美桜さん、中川葵子さん、梅田宗史朗先生 (Dignity担当)

幼稚園・大学・企業とつながる 「おもちゃづくりプロジェクト」

3年生のDignity科では、2025年度からプロジェクト型PBLとして「3歳児が探究できるおもちゃづくり」に取り組んでいます。前段階では「より遠くへ飛ぶ紙飛行機プロジェクト」を実施し、紙飛行機という身近な題材を通して“探究とは何か”を体験的に学びました。その学びを土台に、金城学院幼稚園、星美学園短期大学、玩具メーカーの株式会社ジャクエツ様の協力のもと、本格的なプロジェクトがスタートしました。

金城学院幼稚園では、園長の児玉芽先生に「子どもたちの毎日は探究でいっぱい」と題した講演をしていただき、夏休みには約40名の有志が幼稚園を訪問。園児たちと一緒に遊ぶ体験を通して、子どもたちがどのように考え、工夫しながら遊ぶのかを学びました。星美学園短期大学の森井佳代先生からは、保育の専門的な視点でアドバイスをいただき、同短期大学の学生たちも同テーマに取り組むことで、今後は情報交換や交流も予定しています。また、ジャクエツ様からはプロジェクトへの助言とともに、温かいビデオメッセージも寄せていただきました。

来年3月、“誇りの持てる美しい作品” として展示発表へ

現在、生徒たちは自分の考えるおもちゃの企画書を作成中。企画書が完成したら、次はグループごとに分かれ、プロトタイプ（試作品）づくりに進みます。来年3月に開催される「Dignity発表会」では、“誇りの持てる美しい作品”をテーマに、完成したプロトタイプを展示発表する予定です。当日は全校生徒や教職員はもちろん、プロジェクトに関わってくださった専門家の方々にも見ていただく予定です。

幼稚園や短期大学・企業と連携して動くという経験は、中学生にとって大きな刺激です。生徒たちは「自分たちの学びが社会とつながっている」という実感を持ちながら、主体的に考え、行動するようになりました。プロトタイプ完成までの道のりは、まだまだ試行錯誤の連続です。けれども“誇りの持てる美しい作品”とは、見た目の美しさだけではなく、そこに込められた思いや努力の積み重ねが表れたもの。たとえ結果が思うようにいなくても、仲間と一緒に本気で真剣に探究した時間は、きっと自身の未来を拓く力になるはずです。

子どもたちの“探究心”を育むおもちゃを、私たちの手で、 ワクワクしながら課題に取り組んでいます！



白石 唯羽さん (中3)

**遊びを通して、工夫したり
挑戦する力を育みたい。**

幼稚園で園児たちと遊ぶ中で、子どもたちが試行錯誤しながら楽しめるおもちゃがいいなと思い、「ハンバーガーのバランスゲーム」を考えました。どうすればバランスを崩さずに積み上げられるか？失敗しても、もう一度挑戦したくなるようなおもちゃをつくりたいです。



加藤 玲衣さん (中3)

**いろんな気づきや発見を
おもちゃづくりに生かして。**

紙飛行機や幼稚園での体験から思いついたのは、一つのおもちゃでさまざまな遊び方ができる“ドミノ”。並べて倒すだけでなく、積み木のように積んだり、形を作ったりもできます。一つひとつのピースに表情を描いて、オリジナルティを出したいです。



中川 葵子さん (中3)

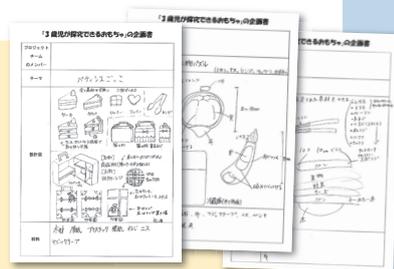
幼稚園児との出会いが、発想を変えてくれた。

幼稚園で出会った子どもたちは、自分なりに工夫して遊びを広げていました。そんな姿を見て、“遊び方を自分で見つけられるおもちゃ”を作りたいと思うようになりました。例えば、すべての面に目や口を描いた積み木なら、建物にも表情が生まれて楽しいはず。課題は多いけれど、形になっていく過程そのものがとても楽しいです。

内山 美桜さん (中3)

**“できた！”の笑顔を生む
おもちゃを作りたい。**

幼稚園での体験で、子どもたちが思った以上に考えながら遊んでいることに気づきました。例えば積み木なら、どうしたらより高く積めるか、どうすれば安定するか……。そんな姿がヒントになり、動く仕組みがわかる透明な自動車を考案中です。走らせながら笑顔になれるおもちゃを完成させたいです。



生徒たちが作成した企画書。



勇気とやる気もらった
ジャクエツ様からのビデオメッセージ。